冬十一月、大宰の官人等、香椎の廟を拝みまつり、訖はりて退り帰る時に、馬を香椎の浦に駐めて、各懐を述べて作る歌

帥大伴卿の歌一首

九五七番
いざ子ども　香椎の潟に　白たへの　袖さへ濡れて　朝菜摘みてむ

大弐小野老朝臣の歌一首

九五八番
時つ風　吹くべくなりぬ　香椎潟　潮干の浦に　玉藻刈りてな

豊前守宇努首男人の歌一首

九五九番
行き帰り　常に我が見し　香椎潟　明日ゆ後には　見むよしもなし